

風の末裔シリーズ・7th シーズンの7

～君影 明日の君に～



©西風そら

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>

その日の西風の里は、朝から落ち着かなかった。

子供達は何日も前から広場の掃除を繰り返しやらされ、女達は通りに面した建物の窓と壁を、これでもかと磨きあげている。普段呑気に構えている男達だって、女達に急き立てられて、軒を直し石畳の修繕をした。

娘達は一番大変だ。大量の料理を作るのだけでも大わらわなのに、早くそれを終わらせて、カ一杯めかし込まなきゃならぬ。皮を剥いても剥いても減らない芋の山に悲鳴を上げながら、気早に塗った紅の口が笑い、何とも華やかな景色だ。

唯一、里の中心の長殿の居室だけが、いつもと変わらず静穏(せいひつ)だった。

「なんだってそんなに大騒ぎになるんだ…」

西風の里の長ルウシエルが、長い髪を指ですきながら、だらしく長椅子に身を投げ出している。

「ナーガが来るのなんて、初めての事でもあるまいに」

「今回は勝手が違つと、エノシラさんが言っていました」

壁一杯の書棚を探っていた灰色の巻き髪の少年が、分厚い一冊を引っ張り出しながら振り向いた。

「これまでは、急な事件があった時に、慌ただしく来て帰るは

かりで。今回のように、蒼の里の長殿としての正式な訪問は、まだ特別だと。…去年のファイルって、これでいいんですか？」

「ああ、それだそれだ。どうしてそんなに簡単に見つかるんだ？ 私が探したって、意地悪く隠れているくせに」

気だるそうにしていた長が、身を起(た)して羽根ペンを取った。

長椅子の前のテーブルには、書きかけの書面が散らばっている。

「ファイルが自分で隠れる訳ないでしょう。第一こんな真ん中にある物を、どうして見付けられないんですか」

「真ん中にあり過ぎるからだろう」

「………」

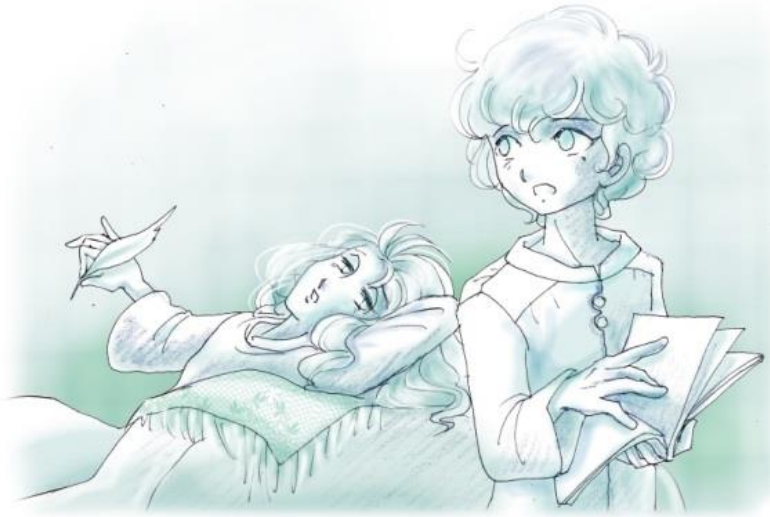
少年は黙ってそれをテーブルに持って来て開いた。

二人でそれを覗き込み、ページを繰る。

永らく保留になっていた、砂の民の一族と西風の里の同盟が、正式に結ばれる事となった。蒼の長は、その証人役をやる為にやって来るのだ。

砂の民の総領ハトウンがルウシエルの父親だったりで、もうとっくに交流はあったのだが、後々の子孫の為に、対等な力関係の今の内にきちんと形にしておきましょう、というナーガの提案で、本日の運びとなつたらしい。

午前中にナーガを歓待し、午後には、どちらの部落内でもな



い砂漠の神殿遺跡に赴いて、調印式の予定だ。

「しかし、今更、調印したってなあ。私の父者(て)てじやだぞ。

あの父者だぞ。顔見て吹き出さない自信がない」

「西風の長様がそんな事を言っちゃいけないよ。ヒトの上  
に立つ者は、形式も大事なんです」

「堅いなあ、それ、お前の父親が言ったんだろ」

「…ああ、そつえばそつかもです……あ！ あった、長様、  
ここの数字が変わっているんです」

「ん？ おお、そうかそうか、ふむふむ成る程」

長は、形のきれいな細い指で、文字をたどった。

「読み上げますか？」

少年は、その指を見つめながら聞いた。

「うん？ ああ、頼む」

差し出されたファイルを受け取る時、指が触れて、ちょっと  
ドキリとした。

数字の照らし合わせが終わって、ようやく元老院に回す書類  
が出来上がった。

「まったく、タペ遅くにギリギリの仕事を持って来るんだから。  
ここの所連日だ。元老院は私を過労死させぬつもりか？」

「長様が早目早目に請求しないからですよ。あちらは脳が半分とろけた御仁ばかりなんだから」

長は頬杖着いていた顔を上げて、少年を見た。夕陽色の瞳が細まるのに、まだドキリとさせられた。

「その小生意気な口振りも、父親と瓜二つだな」

「……」

「まあ、お前が居てくれるから大いに助かる。長の仕事なんて、遠回しな屁理屈と数字の羅列ばかりで、頭が痛いつたらない」

「長様なんだから、そんなの廃止しちゃった方がいいのに」

「そもも行かん物なのだよ。大人の世界には、わざわざややくしくしないと納得しない連中が多いんだ。それはそつと、今日は修練所は行かなくていいのか？」

「行きません、掃除と飾り作りばかりなんだもん」

「むむ」

長は、窓の外の賑やかな光景を横目で見やった。数人の子供が、大きな花飾りを掲げて、通りを駆け抜けて行く。

「スオウ教官の講義の日以外は、行かなくていいです。こここの書庫の書物を読んでいる方が、よっぽど勉強になります」

「そつつか……」

少年は、ちゃっっちゃとテーブルの上を片付けている。こんな

日は、他の子供と一緒に、お祭り気分を楽しんでいたんじゃないのか？ 連日徹夜仕事をしている自分を氣遣ってくれているのだろう。・・・本当に、優しい、良い子だ。

「タウト——!!」

窓の外で、二ツトリの雄叫びみたいな声がした。

「うへ！ ファーだー！」

少年は、クッションを頭に被せて、長椅子の裏に隠れた。

「長様、タウトはいませんか？」

窓から、青いクリクリ目の女の子が覗いた。

「さあ、多分いないと思うぞ」

長は、長椅子に斜めに掛けたまま、愉しそうに目を細めた。

「ホントですか？」

「さあな」

「入って捜してもいいですか？」

「ああ、構わないぞ」

ファーが玄関に回るや否や、長椅子の裏からタッシュしたタウトが、窓から裸足で飛び出した。しかし、玄関に行くふりをしていたファーが待ち構えていた。

「なに隠れてんのよ！ 飾り作り手伝いなさいよ。あたし達に

はっきりやらせて、いっつも逃げちゃうんだから」

「イヤだ！ あんなオンナみたいなチマチマした作業、絶対にイヤだ」

「一旦捕まれた襟首を振りほどいて、タウトは砂ネズミみたいに駆けて行った。

「待ちなさ——い!!」

「ファーが山猫みたいに追い掛けて行った。

「捕まるなよ」

窓から長が、愉しそうに叫んだ。やっぱり子供だ。同じ歳の友達の前の方が、素のあの子なんだろうな。

「おはよう、ルウシエル」

タウトを見送って窓から顔を出している長に、反対側から呼ぶ声があった。長い三つ編みの女性が、小さな女の子の手を引いて歩いて来る。

「ファーが失礼をしなかった?」

「いや、タウトを誘いに来てくれただけだ。おはようエノシラ、おはようミィ」

「オハヨコサイマツ、オサタマ」

女の子が小さい手を上げて挨拶し、エノシラは風呂敷包みを抱えて玄関に入った。

「ルウの事だから、何も支度をしていないんじゃないかと思ったら、案の定だわ。目の下のクマはお化粧でごまかすとして、まずはそのボサボサ頭を何とかしましょう」

「げ! いいよ、このままで。徹夜仕事だったんだ、一寝入りさせてくれ」

「残念ながら、貴方は西風の長様です」

せかせかと化粧道具を並べる母の横で、ミィも一生懸命手伝いの真似事をしている。ルウシエルは、エノシラに髪を鋤(す)かれている間に、うつらうつらし始めた。

「オサタマ、寝チャッタヨオ」

「ええ、だから、少しの間、お口パクションしましょうね、ミィ」

「ン・ン・ン・ン」

幼い娘は、大きく息を吸い込んで、唇を結んだ。

子供の頃と変わらないたっぷりした癖っ毛を、エノシラは喉(のど)かな気分で編んでいた。去年までのルウシエルは、いつもヒリヒリと緊張していて、家族同然の自分の前であって、こんな風に隙を見せる事はなかった。

(タウトが来るようになってからだわ)

エノシラは、部屋のそとにいた男の子の持ち物を眺めて、目を細めた。

タウトは…言っちゃえば身も蓋もなくなっちゃうんだけれど、まあ要するに、ルウシエルの夫だった男性が、別の女性との間に作った子供だ。

浮気って訳ではない。事故で記憶を失くして十何年も行方知れずだったんだから、仕方がない。亡くなったと思われていたのが、別人として、他所の土地で妻子を持って生きているって分かったのは、つい最近だ。

いなくなったのが婚礼の数日前で、ルウシエルとはまだ正式に夫婦(めおと)ではなかったのだが、ルウも彼の子供を授かっていたし、夫と呼んでもよからう。

そのルウの息子のカノンが、遠くの留学先で、ひよんな事でのこの異母弟(タウト)と知り合い、留守の間の自分の部屋の書物の手入れを頼んだのだ。

(…多分それは、カノンのこじつけだろう…)

タウトと過ごすようになって、ルウは驚くほど穏やかになり、安心して見ていられるようになった。

カノンには分かっていたんだ。一見強く頼もしく見えるルウシエル長だが、実は凄く甘えんぼで、いつだって甘える相手を必要としている事を。なのにその甘えんぼスイッチが、限られた相手にしか作動しないって事も。

ルウにとってまことに複雑な存在のその少年(タウト)が最初に現れた時、エノシラはドキドキした。しかし、ルウも西風の里人も、意外とすんなり受け入れた。元々古くから、一夫多妻や一妻多夫の慣習がある土地だったからかもしれない。

最初はおっかなびっくりだったタウトだが、スボラなルウの世話を焼いている内に、いつの間にか入り浸りになってしまった。今では、この家の書棚の隅々まで知り尽くした、立派な秘書だ。修煉所にまで通い出して、もうほとんど西風の子供然としてしている。

ルウの元夫は、海と崖に覆われた海霧の村で、妻の連れ子と、静かに暮らしている。妻は一年程前に亡くなったらしい。

距離はそんなに離れていないが、空からでないとい入れないような辺鄙な場所だ。記憶はほとんど戻っているらしいのだが、西風に戻る事はしない。

(今のままでいいの?)

彼にただの一度も会いに行こうとしないルウに、エノシラは、酷く気が揉めたのだが、言い出す事が出来なかった。

エノシラの夫のシドは彼の親友で、生きている事を知ってすぐ、海霧の村に飛んだ。エノシラも誘われたのだが、ルウと同

じに、会いに行く気になれなかった。彼がいなくなつてからのルウの苦しみを見ていたし、別の女性をめとつた彼は、やっぱり別人のような気がしたからだ。話をしても、きつと以前のようには話せない。単純にすぐに会いに行こうと思える男性が、羨ましいな…と思つた。

(ルウもそうなのかな…)

今の穏やかな状態に浸つて時がすべてを癒し、しわ一杯のお爺ちゃんお婆ちゃんになつた頃には、笑つて会えるのかもしれないな。

眠かけ漕いでいたルウシエルが、目を開けた。

と、一拍置いて、バササッと音がして、開けられた窓から真っ黒い鷹が飛び込んで来た。

「姉者！ タウトの奴、何処行つた?!」

鷹じゃなかった。

眉間に縦線を入れた、黒い肌の少年アデルだ。

「ファーに引つ立てられて、今頃お花作りだ」

ルウシエルが呑気な感じで、歳の離れた弟に顔を向けた。弟なのだが彼は砂の民の血が濃くて、父方で暮している。

「あいつ！、久しぶりに海霧に向いたら、すうっとこっちに入り浸っているっていうじゃないか。そんなんじゃ、シアに予

言があつた時、届けられないだろ！」

「伝書鳩役は今まで通りアデルでよからう、早いし」

「俺だつて忙しいんだ。昨日なんか三峰まで徹夜で飛んで、とんぼ返りだつたんだぞ」

「へえ、三峰ごと」

「いや、そっちはヤボ用でだけねど…」

黒い少年はその話は遮つて、懐から緩く巻かれた漉き紙を引っ張り出した。結ばれた藍のコヨリは、海霧の村の預言者シアの印(しるし)だ。

シアは、件の女性の連れ子で、タウトの父親違いの姉なのだが、その彼女とルウが仲良く文通しているのも、エノシアには不可解だった。

「」苦勞」

ルウシエルはそれを両手で受け取つた。はらりとほぐくと、一房の白い花が出て来た。丸く小さい花が可愛らしく連なつていて、ここいら辺ではあまり見ない花だ。

「シアはお洒落だな」

手紙を読みながら、ルウは何気なくその花を自分の耳の上に差した。碧緑の髪にピッタリだった。

「あら、素敵だわ、きちんと編み込みましようか」

ルウが手紙を読んでいる間に、エノシラは器用にその花房を、編み上げた髪にあしらった。

「何か急な予言なの？」

手紙の一節で目の止まっているルウを見て、エノシラがちよっと不安そうに聞いた。シアの手紙は、たまたま災害の予見だったりする。有り難いのだが、そういうのってやっぱり怖い。

「…いや、蒼の長殿への挨拶と、同盟の永々無事を祈った祝詞(のりと)なんだけんど…」

「？」

「この祝詞じゃ、永々無事じゃなくて、まるで門出だ。詞を選び間違えるなんて、シアらしくないな」

「ああ、そう。でもまあ、新しい出發でいいんじゃない？」

「そうだな、似たようなものか。おお？ いつの間にか髪が出来上がっている。エノシラは魔法使いだな」

「どういたしまつて」

窓の外を賑やかに駆け抜ける足音がした。

「待ちなさい、タウト！」

「しつこいぞ、ファー！」

声はドブプレー効果で近付いたりの遠かかったりする。

「あの野郎！」

アデルが窓から顔を突き出した。

「俺に伝書鳩やらせて、自分は女の子と追っ駆けっこか！」

「げ！ アデル！」

「いいじゃない、どうせアディが、海霧に行きたくてしょうがない癖に」

横槍を入れたファーに、アデルは青くなって赤くなった。

「アディって呼ぶな！」

「シアお姉ちゃんキレイだもんね〜」

「うっさい！ 黙れ！」

今度は、二人とアデルの追い駆けっこになった。

「アデルも何だかんだいって、まだまだ子供だな。…おおう？」

そんな大層な物を着なきゃダメか？」

祭祀用の裾の長い正装を突き出されたルウシエルは、眉をかめて後退りする。

「残念ながら貴方は西風の長様です」

大層な身支度を整えたルウシエルは、エノシラを伴って自宅を出た。馬の発着所で、蒼の長を出迎える為だ。

共同の料理釜の横を通ると、娘達が釜番をしながら、お互いの髪を結いっこしている。ルウを見止めると、かしましくさび



めきながら、お辞儀をした。

「何であんなにキャラキャラ騒いでいるんだ?」

「そうね、ナーガ様に来るってだけで、やっぱり若い娘(こ)達にとっては一大行事なんじゃないかしら。今も昔も、憧れの王子様だもの。それにしても、確かに、テンションが高いわね。」

まあ、女の子はいつだって、お洒落とお喋りの口実が欲しいの  
「..来る方はたまったもんじゃないぞ」

ワクワクの喧騒を横目に通り返ぎ、空飛ぶ馬専用の発着場に到着した。円形の生垣に囲まれた広場で、ここも布や花飾りで彩られている。出迎えに参加する元老院の老人達は、まだ来ていないようだ。

「すごい飾り付けたな、皆、どんだけナーガが好きなんだ」

「あら、ルウはナーガ様に会うの、楽しみじゃないの? 子供の頃、憧れていた癖に」

後ろで待た然と衣装の裾を直すエノシラが、シレッと言う。

「いつ誰がだ! 私の人生において、ナーガに憧れた経歴など一行たりとも存在しない。そもそも私が子供の頃から、あいつ、おっさんだったんだぞ、子持ちヤモメのくたびれたおっさん!」

「あはは、はいはい」

「くたびれたおっさんですみませんね」

突然の背後からの声に、二人は飛び上がった。

びっくり眼まなこで振り向くと…、ちよっとふて腐れ気味の蒼の長殿が、忽然と立っていた。翡翠の額飾りの似合う、相変わらぬのきれいな顔で、歳をとっても居るだけで周囲を引き付ける流麗さは変わらない。

「ナ、ナーガ様!! なんで? えっ、えっ?」

大口を開けるエノシラに、ナーガは慌ててひとさし指を立てて口をすぼめた。

「あっ、あっ…大きな声出さないでください。ちよっと、先に貴方達だけに用事があつて、そおっと来たのです」

そう言うと、ナーガは手に持っていた半透明のなめし皮を、バサリと頭から被り直した。途端、その皮は辺りの景色と同じ色になり、スウツと溶け込んだ。姿を隠すのに重宝な、砂漠の飛びトカゲの皮だ。

「そおっと来ないで下さい、蒼の長様が…」

エノシラが小声で叱咤する横で、ルウシエルは、皮を眺めて首を傾げている。

「それ、父者(ててじや)の持ち物だよな。ナーガ、父者に先に会ったのか?」

同盟式は午後の約束だ。砂の民の代表者とは、神殿で合流する段取りとなっている。

「ああ、はい、これを借りたかったものです。そしたら、ハトゥンが、お返しに草の馬を貸してくれていうから、馬をばへりっこして来たんです」

生垣の向こうでハトゥンの黒衣の馬が、不機嫌そうに飾りの花をカジカジかじっている。

「父者…、同盟式の日は何やってんだ。子供か！」

「ハトゥンは相変わらずですなえ。くだびれたおっさんとして

は、あの若々しさの秘訣を伝授して貰いたいです」

「その、ねちっこく根に持つ所が、おっさんだってんだ」

「あの、ナーガ様、私達だけに用事って…」

エノシラが、話の腰を折るのを申し訳なさそうに聞いた。

「あ、そうそう、ここじゃなんですので…の話です。二人共、

ちよっと着いて来て貰えませんか」

「…っ。」

\*\*\*

海霧の巫女、シアは、灰色の長い巻き髪を風に揺らしながら、スツと立って、千切り絵みたいな空を見上げていた。

今日の風は心地よい。母が亡くなってから鳴りを潜めていた、久しぶりの明るい風。

西風の喧騒から遠く離れた、海沿いの崖の上の、ひなびた海霧の村。いつもは深い霧に覆われているのだが、今日は珍しく、青い空が美しい。

「シア、どうしたのか？」

背後の家の扉が開いて、青銀の髪の男性が、身体を傾けながら杖を付いて歩いて来た。

「何か予知でもあったか？」

「いえ、お父様。でも、良き風が」

「ん？」

見上げる空に黒い点が見え、やがて騎馬の形となる。

「アデルか？ いや…」

騎馬はまたたく間に騎手が判別出来る程になり、杖の男性は乗り手が誰だか分かる、ハッと息を呑み込んだ。

ナーガの深緑の馬に跨っているのは、黒い肌に黒い衣装の、

眉間に閻魔様みたいな縦線を刻んだ男性。

「やっと貴様をブン殴れる日が来た。覚悟しろ」

\*\*\*

「ああ、ドンピシャのタイミングです。さすがはハトゥン」

西風の里を出てすぐ傍らの、太古の神殿跡。午後に同盟式が行われる予定の場所だ。

朽ちた丸い石床の上で、ナーガが空を見上げて声を弾ませた。  
釣られてルウとエノシラも、同じ方向を見上げる。

「っ？」

降りて来たのは、ナーガの馬に乗った、漆黒のハトウンだ。  
だが、鞍の後ろに大荷物を乗せている。その、巻いた絨毯みたいな荷物が、遠目にびくびく動いているのが分かる。

「あらあら、へ抵抗したら貰す巻きにして運んでくればいいんです」とは言いましたが、まさか本当にやっちゃったとは…」

ナーガの言葉に、勘のいいルウシエルが、衣装の裾をたくし上げて、飛び返すさ。った。

「ぎ、貴様…！ 何て事を…」

「はい、何てコトを、やっちゃいました。殴っていいですよ、でも後にしてください。何てたって、今の西風があるのは、海霧の預言者殿の助力なくしては有り得ません。砂の民との同盟式に、海霧の長殿に同席頂くのは、至極自然な流れかと」  
歯をギリギリ言わせるルウの肩に、エノシラが後ろから両手を置いた。

「ルウ、こうなったら、腹をへくひまじょうじ」

「エノシラもグルか?!」

「いえ、でも、ナーガ様に手紙を頂いていて…」

「はあっ？」

「ルウを目一杯きれいにおめかしさせて、一番長くて動きにくい衣装を着せておいてくれと」

「なんだよっ、それっ！」

「ごめんなさい。最初意味が分からなかったのだけれど、さっきハトウンさんが草の馬を借りた話を聞いて、何となくの流れが読めちゃいました。ストレートにそのままでしたね」

「〜!!」

言っている間に、馬はもう真上だ。ルウは、とにかくこの場を逃れようと焦ったが、案の定、長い裾に足を絡ませてつんのめった。その隙を突いて、彼女に飛び付いた者達がいる。

「っ？」

なんと元老院の老人達が、捻じれ松の頑固な根っこのように、彼女を囲んでしがみ付いているのだ。

「ど、どこから湧いて出た？」

「その遺跡の影にしゃがんでおりました。蒼の長殿は腰痛持ちの年寄りに無茶ぶりをしなされる」

「ナーガ〜」

ナーガは黙ってにこにこど、老人達に黙礼している。

「逃げるのなら逃げなされ。このか弱き老人どもを、引っぺが

して突き倒す所業がお出来になるのなら」

「どの口が言つか、卑怯者」

何とか抜け出そうともがくが、本当に身動きが取れない。連日の徹夜仕事でヘトヘトな上に、衣装の裾も抑えられて、にっちもさっちも動けないのだ。まさか、徹夜仕事をねちねちと小出しにしていたのも、これを狙っていたのか！

「我が娘は往生際が悪いな」

ハトウンが地獄の使者みたいな形相で降りて来て、老人達に絡め取られたルウの前、地上数メートルの高さで馬を止めた。

鞍の後ろにはぐるぐる巻きの荷物。頭から△シロを被され、太い荒縄で隙間なくベッチリ縛られている。

「同盟式に同席って恰好じゃないだろおーっ！」

「知らぬわ。この俺様が今日という日まで大人しく我慢していた方を、奇跡と思え」

そう言って、息も絶え絶えにピクピク動いている荷物を、片手で軽々放り上げ、縄を掴んでブンブン振り回した。

「耳に粘土を詰めて、目隠しさるべつわ。自分が今どこでどうなっているか、いや、もう上も下も分からんだろうな。鮫の巢の真ん中に放り込まれるか、火炎山の火口か、どちらがいい？ かって聞いてやったから、恐怖で発狂寸前かもしれん。こいつは

それだけの目に遭う所業をやらかしたんだ」

「父者、お、降ろして、早く降ろしてほめてやって」

ルウは動きを封じられたまま、父に懇願した。

しかしハトウンは、光のない黒い瞳で、娘を見下ろした。

「お前は、こいつの顔も見たくないのだろうか？ 今更こいつなんてどうなったって、構いやしないだろ。だが俺は治まらねえ。俺様の大切な娘を、どんな目に遭わせたと思っていやがるー！」

段々に声が大きくなって、興奮したハトウンは悪鬼の形相で、抱いだ△シロを頭上高く掲げた。そして、頭から固い地上に叩き落した。

「ソ、ソラァー！！」

ルウは少女みたいな声で叫んだ。狂ったように老人達を振り払い、衣装を思い切りまくり上げて、地面に落ちる寸前の△シロの頭に飛び付いた。瞬間、頭の中がフラッシュして、周りがスローモーションになった。

「私はどんな目にも遭っていない。ソラが生きていてくれただけで、他の事なんか、何でもどうでもよかったんだ。顔なんか見たいに決まっているだろ。だって私には、生涯どうしたってソラしかないんだから」

「うあああ!!」

離れた所から声がして、何も無い空間から、二人の人影が転がり出た。

「大丈夫ですか、レン」

ナーガが、右手をゆっくり降りながらそちらを見た。彼の前では空間がシャボン玉みたいに揺らめき、振り払われた老人達が、ふわりトンと地面に降りている所だ。

△シロを抱いて地面に叩き付けられた筈のルウも、衝撃を受けていない。ナーガの起こした風が、すべてを穏やかに包んだのだ。

しかし、ルウの関心は、そちらにはなかった。

「ソ・ソ・ソ……」

赤いバンダナの少年レンと一緒に転がっているのは、△シロに包まれるまわっている筈のその下。

十数年ぶりに見るその顔には、年月分の皺がある。でもそれらはあまりに呆気なく、ルウの中にスッと入って来た。ひとつ違つとしたら、目の周りの丸いアザ。

「ちゃんと支えていてあげろって言ったろ、レン」

ルウが懐に抱いた△シロの中から、自力で縄を切って、全然

ソラじゃない男性が出てきて、ルウはびっくりして飛び退った。同時に、自分のヘソから下が思い切りあらわになっていたのに気付いて、小娘みたいに真っ赤になった。

「だって父さん、ソラさんが急に、前に駆け出すから」

少年の手の中には、さっきナーガが持っていたのと同じ、姿を隠す飛びトカゲのなめし皮がある。

その少年の手をエノシラが引っ張って、離れた柵の所で、ちやっかり見ているナーガとハタウンの所まで連れて行った。

「さすがはハタウンですね。あの『本当にやっちゃつかも感』は、貴方でなきゃ出せません」

「俺はマジで、あいつを簀巻きにしてギタンギタンにしてやりたかったんだ。でもシドが乱入して来て、それだけは勘弁してやってくれて、土下座までするから」

「それ、言わないでって頼んだじゃないですか。ああククラする、あんなに思いっきり振り回さなくても」

身代わりで簀巻き役を請け負っていたシドが、縄を解きながら、遅れてそちらに歩いて行った。老人達も、来る。

「久し振りに長様の黄色い悲鳴を聞いて、若返りましたぞい」

遺跡の丸い床にポツネンと残された二人。

ルウは茫然と尻もちを付いたまま。

ソラは前のめりに転んで四つ這いのまま。

互いに目を見開いて、ただただ見つめ合っている。

「その青タン・・・父者か」

ルウがやっと口を開いた。

「会った瞬間噓りました・・・」

ソラがかすれた声で返した。

「あのテンポじゃ、会話が進展するの」三日くらいかかったっや  
うわ」

レンが呑気に両手を頭の後ろで組む横を、いきなり何かがド  
タドタと駆け抜けた。

「ファー、こっちこっち」

「タウト！、待ちなさい、こら」

「てめえら、待ちやがれ！」

「あ、あ、そっち行っちゃ駄目、貴方達」

エノシラの言葉にお構いなしに、タウト、ファー、アテルの  
三人は、石のように固まっているルウとソラの側まで駆けて、  
周りをぐるぐる回った。しかしエノシラは、彼らが、さっき  
は持っていなかった荷物をそれぞれに抱えているのに気付いた。  
あれは、何・・・？

——聖きよらなる西風の空に幸多かれ——

ファーが唄いながら、自分の荷物：花飾りを投げ上げた。西  
風の婚礼の儀式の時に唄う、無垢なる子供達の歌だ。

「お、お前達、悪ふざけが過ぎるぞ。それは、ふざけてやっ  
ちゃダメなやつだ」

ルウがあたふたしながら言った。

「大真面目だぞ、姉者。俺だって恥ずかしくて死にそうなんだ」

「アディ、真面目に唄いなさい」

「アディって呼ぶな」

言い争いをしながら花を投げ合う二人を背に、タウトが一歩  
前に出て、抱えていた包みをスルスルとほどいた。

「そ、それ・・・！」

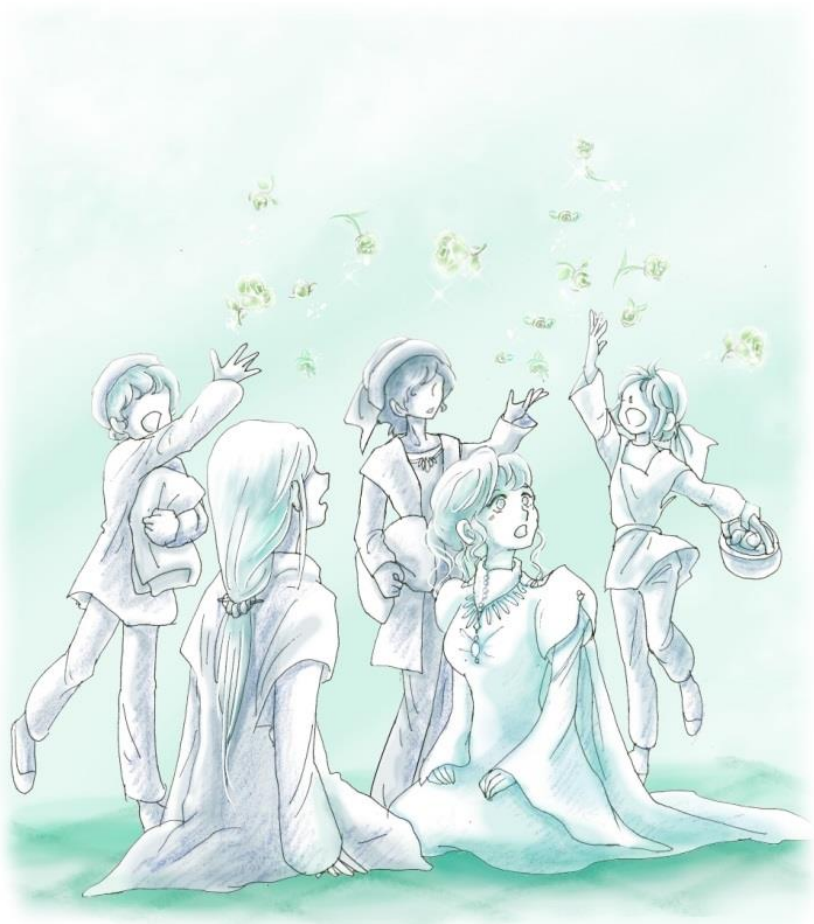
ルウは真つ赤になり、ソラは目を見開いた。

広げられたそれは、襟に白絹刺繍の、青磁色の長衣。十数年  
前、少女だったルウが、手を絆創膏だらけにしながら縫った、  
新郎の衣装。

「そ、それ、誰にも見付からない所に隠してあった筈・・・」

声を上ずらせるルウに、タウトがシレッと言った。

「いいえ、めっちゃ真ん中にありましたよ。見付けるなって方  
が無理です」



衣装に釘付けになって黙ってしまったソラに、タウトはそれを目の高さに掲げて近付いた。

「書物は読んであげないと寂しがると、衣装も袖を通してあげないと寂しいよ、父様」

「…タウト、それとこれとは…」

「この衣装は長様と一緒に、すうっと着てくれる下着を待っていたんだ。本当は僕が着てあげたくてしょうがないんだけど、残念ながら寸法が合わない。仕方がないから、父様に譲ってあげる」

後ろで掴み合いをしていたファーとアデルは同時に振り向いて、吹き出す寸前の顔をしたが、タウトが大真面目だったので、必死に堪へてくれた。

「ナーガ、ちょっと命令して来いよ。あいつ、お前には逆ひねらないだろ」

柵にもたれて、ハトゥンがじれったそうに呟いた。

「自分の意志で袖を通さなきゃ意味がないです」

エノシラに言われて、泣く子も黙る漆黒のハトゥンは黙った。

昔から、この手の女性には、彼は勝てた試しがない。

「ねえ父様、着たくないの？ じゃあやっぱり、僕が着ちゃうよ。今はフカフカだけれど、あと十年もすれば、この衣装にも長様にもピッタリの、最高の男になる予定なんだ」

タウトが本当に袖を通しそうになって、ルウは眉を八の字にしてあわあわした。婚礼の衣装は特別だ、誰が来たっていい訳じゃない。ソラが思わず叫んだ。

「や、やめなさい！」

「なあに、父様」

「それを着る者を決めるのは、西風の長殿だ。お前じゃない」

「うん、その答えはさっき長様が言ったよね。けっこう勇気を振り絞った感じで言ったよね。父様、聞いていなかったの？ 聞こえていたけれど、聞かなかった振りをしているの？」

柵の所のシドが、ナーガと顔を見合わせて、口の端をぶるぶる震わせた。誰かさんの若い顔を、そのまんま見ているようだ。

短い時間、焦然と黙っていたソラが、やっと声を出した。

「タウト、…立たせておくれ」

少年は慣れた感じで父親の懐の下に潜りこんで、背中を彼を押し上げた。

「ソラは足がきかない」

アデルがルウにそっと耳打ちして、タウトを手伝いに行った。



ソラは傾きながら立ち上がったが、ルウが目を見開いて凝視しているのに気付き、慌てて訂正した。

「大した事はありません。杖を使えば不自由なく歩けますし、それよの…」

「・・・！ カノンを助けた時の怪我かっ」

(やっぱり勘の良いヒトだ…)

「これは私が自分で負った怪我です」

ソラはその話を斬るように、強くピシリと言った。ルウは言葉を止められて、肩を震わせて黙った。

「ルウシエル・・・私は過去のソラとは違います。昔、貴方の手を取って共に駆けたソラは、もうおりません」

座り込んだまま、ルウは肩を落とす。そう…そつだよな。

しかしその目の前に、懐かしい手がスツと差し出された。

「ただ、もし、今の私…海霧のアルトでよろしければ、今日この衣装に袖を通す事を、お許しくださいますか」

シドとナーガが、今度は思い切り肩を竦すくませた。

「ながっ!! もっと普通に着れないのかっ」

「ちっとも変っていませんね、彼。何だか安心しました」

ルウは、差し出された手に指先だけ触れて立ち上がった。

「えっと、それ…あんまり近くで見なくてくれ。あの寝め上手なエノシラですら、言葉を失くしていたんだ」

「着てしまえば見えないから大丈夫です」

ソラはそう言いつて、タウトから衣装を受け取ると、本当に見ないようにしながら素早く袖を通した。もうちょっと感動的に着て貰いたかったルウは、小さく口をバクバクさせた。

後ろでファーが、

「タウトのお父さんって、軽く天然入ってる?」

と聞くのに、アデルが眉間に縦線を入れて頷うなずいた。

次の瞬間、ルウは、自分の頭上の青空に、白い円がぱっと広がるのを見た。

「??」

三人の子供が、大きなレースの三方を持って、投げ上げてルウに被せたのだ。山紫陽花(やまあじさい)の花刺繍が溢れた、見事なレースのヴェール。アデルが抱えていた荷物だ。

「三峰のカーリが編んだんだ、姉者」

「カーリ? あのカーリが?」

レース編みの所々に、変なコブや大穴がある。

「ヤンとフウヤが手伝った所は悲惨だけれどな」

「……」

三人が手を離すと、ヴェールはふさりと彼女を包んだ。

「準備OKよー！」

ファアの叫びを皮切りに、どこに隠れていたのか、ミィを先頭に、部落の子供達が一斉に駆けて来た。手に手に花かごを持っている。

「サチオオカシ」

小さな手が、優しい色の花飾りを投げ上げる。

「幸多かれ、幸多かれ」

他の子供達も一斉に唄いながら花びらを投げ上げた。いつの間にか、紅を塗った娘や里人達も混ざっている。

キラキラ舞う花吹雪の中、ルウがやっと口を開いた。

「き、今日は、砂の民との同盟式じゃなかったのか…」

まるで子供が泣き出す寸前みたいな声だった。

「そんなの、『いつい』に決まっているだろ。この状態でまだそんな事言うてんのか？ どんだけ空気が読めないんだ、姉者」

花を投げ終わった里人達が、腕まくりをしながら話し合っている。

「さてさて準備をしなきゃ。婚礼の宴ってやるの？ 同盟式の酒宴と込みでいいの？ あ、料理はお祝いの盛り付けに変更よ」

「あら、貴方達は、この計画、聞かされていたのじゃないの？」  
エノシラが不思議そうに聞いた。

「いえ、私は聞いていないわ。皆は？」

先程、釜戸の前でキャラキャラ笑っていた娘が言い、周囲の娘達も同様に首を横に振った。

「何日か前から妙な噂は流れていたけれどね。同盟式の日、ハトウン様が凄くサプライズを運んで来るとか。どこで聞いたんだっけ」

「あら、貴方が言ったんじゃないか？」

「さあ、私は貴方に聞いたかと思っただけけれど」

皆が口々にさざめき、最初の娘が取りまとめるように言った。  
「とにかく皆ウキウキして張り切っちゃって。今朝もお料理しながら盛り上がったのよね。そしたら長様のご登場！」

「へ…？」

ソラと共に離れた階段に腰掛けて、何気なく会話を聞いていたルウシエルが、ポカンと口を開いた。

「一目で分かったわよね」

「そうそう、あっ、今日でもしかして…！」

ルウは、自分の格好を見下ろした。祭りの時にしゅっちゅう着ている祭祀用の衣装なのだが…。

「違いますよ、衣装じゃなくて、その花」

「花……」

髪に編み込まれた白い花……に、手をやる。

「だってその花、『とっておきの幸せが貴方に訪れる』って意味があるんです。私達の間では、いざという時にお友達にあげる、特上の贈り物だわ。だから女の子ならせうたいにピンと来ます」

「……」

「その後、ファー達が、部落中を駆け回って、空を指したの。」

ハトウン様が『誰か』を簀巻きにしてこちらに降りるのが見えて。よし、いまだ！ っって」

「一斉に花飾りを挿んで、駆け出したよね。早かったわあ、皆」

「……」

ハトウンがズカズカ歩いて来て、ルウの顔を覗き込んだ。

「まことに素晴らしい部族だな、娘よ」

里人達は部落へ戻り、遺跡の階段では、疲れ果てたルウが、

シエットコースターから降りて来た所みたいに、半分気絶状態でふったりしている。隣には、緊張の糸がぶっつり切れたソラが、肩を占領されて身動き出来ずに、これまたぐったりしている。

元老院の老人達も、その光景に目を細めて、一旦引きあげようとするそろそろ歩きだした。調印式にはまだ時間があるのだ。

「馬で送り返しましょう」

シドとレンが、隠していた馬を曳いて来て、年寄り達を丁寧に乗せた。

「あ、ひとつ、教えて頂けますか」

ナーガが何気ない風に、去りかける馬上の長老に声をかけた。

「遺跡の陰に……隠れていて下さいって、私が手紙で頼んだのですよね……」

「ああ、手紙には隠れているとしか書かれておらんかったが、あそこで引き止めるのがわしらの役割だろうと、咄嗟に動いたのじゃが……もしかして、違っのじゃったかいの？」

ちよっと不安顔になる長老に、ナーガは慌ててにっこり微笑んだ。

「……いえ、身体を張らせてしまって申し訳なかったと」

「いやいや、仲間に入れて貰えて、嬉しや嬉しや」

老人達が曳き馬で去った後、ナーガは今度はエノシラに向いた。

「ええと、エノシラ……」

「はい……」

何かを察したエノシラが、ちよつと緊張顔で控えた。

「あのですね、私を手紙で、ルウにお洒落させて、踏んつけそつな長い衣装を着せておけつて、頼んだのですよね…」

「…は…い…」

答えながら、エノシラは、一生懸命思い出そうとした。

蒼の里から鷹が来て、いつものようにファーが手紙を外して…

「俺も一個聞いていいか？」

エノシラが考え込んでいる間に、ハトゥンが片手を上げた。

「なあ、今回の同盟つて、ナーガが言い出したんだよな？ 今

が丁度良い時期だからとか。で、アデルに手紙を持たせて、そつちから連絡をくれたんだよな」

「……」

ナーガは一点を見つめて止まっている。どう返事しようかと途方に暮れている顔だ。ハトゥンも、だんだん不安顔になつて来た。

「それで…今日ここにソラを運んで来て、強引にルウに会わせちまおうつて計画したのも、ナーガだよな？ だから先にうち

に寄つて馬を貸してくれたんだろ？」

は思い出した。自分は、へつとうナーガのお墨付きを得てソラ

をぶん殴れる！ つて飲びで頭が一杯で、深く話もせずに飛び出してしまつたのだが。まさか…

エノシラが、そつと三人の子供を見た。ファー達は散らばつた花飾りの掃除を、せかせかとやつている。

「はいはい、そうでした！」

二人の思考を中断するように、ナーガが手をボンと打つた。

「いろいろ計略する事が多すぎて、ど忘れしちゃつた事もあるようです。貴方達もご苦労様でしたね」

ナーガに声を掛けられて、三人の子供はペコリとお辞儀をして、また掃除に戻つた。

里に噂を流したり、新郎の長衣を持ち出したり、カーリの編んだヴェールを運んだり…、すべてナーガが子供達に頼んでやらせた事。なるほど、それなら頷ける。

エノシラはホツとした。そう、ファーにいくら手紙をすり替えるチャンスがあつたとしても、やっぱりあり得ないわ。特に元老院の老人には、ややこしい形式に古語も交えた難しい手紙を書かなきゃいけない。そんなの子供にねつ造出来る訳ないじゃないの。まったく何を考えているの、私つたら。

ハトウンも思い直した。アテルにそんな策略が出来るものか。飛ぶのが早いからフットワークだけはあるんだろうが、まだまだ大人の言う事を聞いているだけのガキンチョだ。他の連中はともかく、ナーガまで担ぐなんて、あり得んだろ。やれやれ、俺もヤキが回ったモンだぜ。

胸を撫でおろす二人の傍らで、ソラがゆっくりと顔を上げて、黙々と花飾りを拾う息子(タウト)を見た。俯うつむく灰色の巻き髪の下の方が、静かにほくそ笑んでいるのが見えた。

仲間の特性を最大限に利用し、最後にナーガ様が全部被ってくる事まで、折り込み済みだったんだろな。

・・・我が息子ながら・・・いや、我が息子過ぎて、嫌になる・・・

\*\*\*

「まあ…でも、結局、最後のスイッチを入れたのは、ルウシエル自身だったのですがね」

同盟式を終えた酒宴の席で、ナーガが盃を酌み交わしながらハトウンに言った。

「ソラは最初、姿を隠して誰にも会わず、陰で同盟式の立ち会いだけして帰る…って条件で、やっとここにきてくれたんですって?」

「ああ、あの意地っ張り野郎。ナーガの意向には逆らえないっ



「てんで、来ることには少々承知したものの、トカゲの皮の下に隠れているんじゃ、意味がねえだろ。せつかく先にルウを連れ出して貰ったのに。だから、シドとつるんで、一芝居打つ事にしたんだ」

「多分芝居だろうなあと思っただけでも、ハラハラしました。シドが提案したのですか？ 勇気がありますねえ」

「いや、あの娘(こ)、シア…だっけ？」

「？」

「ソラをレンの馬に乗せて先に送り出した後、彼女が俺らを呼び止めたんだ。可愛い顔してニッコニコして、ムシロと荒縄を出して来やがった」

「……」

「血は繋がってなくても、やっぱりソラの娘だな」

「はあ…」

「ま、お陰で我が娘の本音が転がり出た。あんなにグッと来る言葉を言われたら、ソラみたいな純情な男はイチコロだったんだろ。生涯ソラしかいないとか」

「私も誰かに言われてみたいですねえ」

「言われた事ないのか?！」

「ないですよ、どうせ、くたびれたおっさんですから」

「ナーガ達の場所からちょっと離れた子供席で、赤いバンダナのレンが、ぼおっと座り込んでいる。目の前では、妹達やタウヤアデルが、子供らしく無邪気に御馳走を頬張っている。

(けど、さっきの…)

皆が皆、納得する中で、彼には一つ引掛かる事がある。

(トカゲの皮の下で、ソラさん、足が悪いとは思えない凄い勢いで飛び出したんだよなあ…)

子供席から、向こう端の席に、本日の主役の二人が見える。

今更晴れがましいのも望まぬだろうと、皆がそっとしてあげている風で、静かにポツポツと語らっている。

「ま、いいか」

レンの小さな眩きは、賑やかな喧騒に埋もれて消えた。

\*\*\*

「キミは行かなくていいのかわ？」

砂漠の空の上。西風の賑わいを眼下に、雲の中に浮かぶ二騎。

水色の妖精が、隣の青銀の髪の少年に聞いた。

「いいです、デレデレした母親の顔なんて、一番見たくない年頃ですから、僕」

カノンは、遠目に小さい、白いヴェールの女性から目を離さないまま、ツラツと言い放った。

「さっきピンポイントの突風を放って、自分の父親を突き飛ば

したろ」

「そういう年頃でもありますから」

「かわいくないな」

「でも結局、海霧に帰るのでしょね、ソラは」

「ああ」

カワセミも、青磁色の長衣の男性を見つめながら呟く。

「好き勝手出来る子供じゃないからな。奴は海霧の村長だし、大切な巫女の後見人だ。それに…」

言葉を切ったカワセミの横顔を、カノンはじっと見る。

『アルト』が居ないと、海霧の時は流れない」

「ああ、やっぱり、そうでしたか」

「多分、ルウシエルも知っている。アイシャと手紙でやり取りしていたからな。タウトのように『アルト』が戻ってから生まれた子供は別だが、それ以前の海霧の村人は、『アルト』があの村に居ないと、歳とる事も、子を成す事も、天に召される事も出来ない」

「…呪い…みたいなものですか？」

「逆だが…ソラにとってはそうかもな」

馬上の二人は今一度、宴席の隅の二人を見た。そこだけシン

と色が違って、別の世界のように見えた。

「解く事は出来ないのですか、その呪縛」

「……」

「貴方やナーガ長でも？」

「すまないな」

水色の妖精は地上から目をそらせて空を仰いだ。

「あのアイシャですら、解こうと試みてしくじったんだ。術の失敗の代償を、その身で一度に払う羽目になった」

師匠の言葉に、少年はハッと驚愕の顔を上げた。

「……知りませんでした…」

「ああ、知っている者はごく僅かだし、今知らない者は、一生知らなくともよい事だ。キミも胸に刻むだけにしておけ」

「…はい」

「だからソラは『アルト』として、海霧の村人やシアと共に生きる決意をしたし、ルウシエルは、そんなソラに会いに行くのをためらっていた。憎みたくない相手を憎んだり、大切な者に辛い思いをさせたりしそうで、怖かったんだろうな」

「……」

「難しいか？」

「いえ…単純ですよ」

「そうか？」

「僕がとっとと立派な西風の長になって、早晚に、あのヒトを引退に追い込んであげます。そしてらどこか海辺の片田舎で、誰とでも好きなように暮らせばいい」

「ホント、かわいくないな」

雲を裂いて、いきなり片羽根の少年の白蓬の馬が飛び出して来た。背後から、襲い来る大サソリ。

「また凄いのを連れて来たな、シンリィ」

「結界を張る。行くぞ、カノン」

「はい！」

空間が渦巻いたと思ったら一瞬で、三騎と怪物は消えた。

後には、何事もなかったかのような、砂漠の春霞の空が広がっていた。

くおしまい